やまがた 移住者ストーリー

千葉から新庄市に

内藤秀一さん

「質の高いデザイン」発信

新庄市中心部にブランディング・デザイン事務所「グラッシーデザイン」を構える内藤秀一さん(43)＝同市末広町＝は千葉県南部の太平洋側で育った。高校時代は「サーフィンばかりやっていた」と照れくさそうに話す。20年ほど前、最上地域出身の知人に誘われ、同市内の飲食店で働くことになり移住。2007年にデザイナーに転身し、現在はスタッフ5人を雇い、雪国新庄から「質の高いデザイン」の発信を続ける。

JR新庄駅前の居酒屋で6年間ほど働くうちに顔なじみが増えた。その後、独学でデザイナーを始め、地元企業の名刺デザインや店舗のパンフレット作成などをこつこつ進めた。「フリーのデザイナーが新庄で食べていけるわけがない、という考えを逆手に取ろうと思った」と気負いなく振り返る。県立新庄病院のロゴマーク公募に手を挙げ見事に採用されるなど自信を深め、10年に事務所を立ち上げた。仕事が軌道に乗る中で家族もできた。

「仕事先も増え、1人でやっていける環境はできた」と感じた。一方で「もっと楽しいことができるんじゃないか」との思いがふつふつと湧いた。18年にスタッフ1人を採用。会員制交流サイト（SNS）を使った情報発信に力を入れ、幅広い客層を取り込んだ。19年6月に現在のオフィスを開設。同市外から移り住む20代のクリエイターたちと一緒に企業や団体、個人の求めに応じた新たなデザイン、提案の磨き上げに取り組む。

独学でデザイナーを始め、現在は新庄市中心部でオフィスを開く内藤秀一さん ＝同市大町

新型コロナウイルス禍でリモートワークが広がりを見せるが、「全てリモートで解決できるとは限らない。お客さんの所へ出向き、対面しながら作り上げていくことが良い仕事につながる」と言い切る。人口減少が進む最上地域にあって、若者と地元企業を引き合わせる新たな企画を思い描く。若い人の目に映る魅力ある職場を提案していく考えだ。「デザインを通して、やる気やわくわく感を提供できるのが自分たちの仕事」。オフィス正面の大きな窓から見える除雪車を横目に言葉に熱がこもった。

（佐々木亨）

ソ「さ

を待ちたい」と前を向いた。

（渡部真美子）

ローラ・SACAで開かれ、市民らが小正月を彩る色鮮やかな団子木などの

色鮮やかな団

江戸時代初期
いるとされ「だ
と呼ばれ親しま
新型コロナウイ
年から縮小開催
この日は3店が
赤や黄色の飾り